

佳作

私の心が動かされた日

神奈川県横浜市立岩崎中学校一年 室町 春那

七月の終わり、絵本作家の林明子さんの展覧会を見るために私と母と弟の三人で銀座へ向かった。私は初めての銀座に期待を膨らませ、弟は大好きな電車やバスに乗ることを楽しみにしていたようだった。

運転席が見える先頭車輛は弟のお気に入り場所だ。この日も先頭車輛に乗り込むと、弟と同年くらいの男の子が二人、運転席をのぞきこんでいた。弟が行くと、まるで友達のように電車の話を始めた。へえー。私は少し驚いた。いきなりそんなふうに電車に乗り合わせた誰かと、私はしゃべることができないだろうか。なんだか弟がいつもより大きく見えたような気がした。

ふと後ろを見ると、車内の床を赤いクレヨンがコロコロと転がってくる。クレヨンは、お父さんに抱っこされている男の子の小さな靴にあたって止まっ

た。お父さんが靴を履かせる際に気が付いて、クレヨンを拾い、小さな男の子を片手で抱き上げると、

「これ、違いますか？」

と私たちにクレヨンをさしだした。母が、後ろから転がってきたことを伝えると、お父さんは次の駅で降りるようなのに少し考えて、車内を歩き始めた。

子どものいる人に声をかけ、クレヨンの持ち主を再び探し始めたのだ。

「素敵なお父さんだね。」

と母が言って、私と母は思わず顔を見合わせた。なんだか胸が温かくなった。

展覧会は最終日だったこともあり、混雑していたが何とか見ることができた。林さんの描く絵はどれもすばらしく、「子どものほっぺを描くのが好き」という林さんの言葉が印象的だった。私はそのぶつくりとしたほっぺを見ていると、林さんの思いが伝わってきて自然と笑顔になった。

展覧会を見終えて地下鉄の駅へ向かう地下道を歩いていると、前から来た女の人に声をかけられた。

英語を話していて、二人のおばあさんも一緒だった。どうやら銀座線の乗りかえの駅についての質問のようで、母と私は何と言っているのか分からず、

「じゃあ、一緒に行きましょう！」
と指さしながら、私たちは来た道を戻ることにした。
すると弟が先に走って行って、

「ギンザライン、トゥエンティーター」と天井
の案内板を指さしながら話した。「えー」。母と私は
驚いてしまった。

銀座線でその方たちと別れるとき、後ろにいたお
ばあさんたちが手を合わせてニコニコしながら、こ
ちらに向かって

「シェイシェイ、シェイシェイ。」
と言ってくれた。

帰りの電車で、さっきのおばあさんの笑顔を思い
出した。それは私の目にとってもやさしく映り、林明
子さんの絵とも重なった。そして道を尋ねてきたあ
の外国の方たちの目にも、日本での私たちとの出会
いがやさしく映ればいいな、と思った。